

平成 1 8 年 6 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859）

## 蹴 飛 ば し 地 蔵

青梅市谷野 65 番地の 1 にある十王堂に、延命地蔵とともに安置されている木製の十王像 10 体は、地元の人々から「蹴飛ばし地蔵」と呼ばれています。子ども達が、この像を自由に投げたり蹴飛ばしたりして遊んで良いとされ、それどころか、この像で遊べば遊ぶほど子どもたちが元気に成長し、お地蔵様達はそれを喜んでくれるといわれています。十王像は、大きいもの 2 体が、高さ約 26cm、他は約 21cm で、横幅はいずれも約 11cm、厚さ 7cm ほどで、ヒノキ製です。持ってみると軽く、無数の虫食い穴があいています。かつて子ども達にさんざん蹴飛ばされたためか、お顔はほとんど形を成さず、体はあちこち欠け、磨り減って丸くなっています。

子どもの頃、この「地蔵」を蹴飛ばしたり、放り投げたりして遊んだという古老達に聞いてみました。現在、間口 2 間、奥行き 2 間の規模の十王堂は、山根通りの南側に位置する広場に、北向き地蔵、庚申塔、火の見櫓と共に建っていますが、昭和の始め頃、十王堂は今よりずっと大きくて屋根は麦藁葺きでした。堂内は荒れていて、いつでも自由に出入り出来ていました。通りを往来する自動車はまだ少なく、広場は子ども達のいい遊び場になっていました。昭和 30 年頃までお地蔵様を持ち出しては遊んでいましたが、その後は、自動車の交通量も増加し、広場でお地蔵様と遊ぶ子ども達の姿を見かけることはなくなったといえます。

現在、「蹴飛ばし地蔵」は普段は鍵がかけられた十王堂の中に安置されていますが、8 月の第 1 日曜日に行われる十王堂祈願祭では、見ることが出来ます。

ところで十王とは、「十王経」に説く、冥界で死者の罪業を裁くという 10 人の王のことで、初七日から三周忌までの間に死者が各王の庁で順に裁きを受け、これにより来世の生所が定まるとされ、遺族の追善供養と地蔵への帰依が勧められました。日本では平安末期から十王信仰が盛んになります。

地蔵菩薩は、サンスクリット語でクシティ・ガルバといい、大地を母胎とするものという意味で、その広大な慈悲心や菩提心が、生命を生み出し育む大地のような徳にたとえられたものです。釈迦入滅のとき、その委嘱を受けて、弥勒菩薩出現までの無仏の間、六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）の衆生を大きな慈悲心で救うとされます。日本では、平安末期から地蔵信仰が貴族社会に広まり、中世には、天上から救済活動を行うのではなく、自ら六道を巡る地蔵菩薩は庶民の人気を得て、地蔵信仰は庶民の間に広まっていきました。弱

者、特に子どもを守り救うとされ子安地蔵や子育て地蔵の信仰も普及しました。さらに、古来伝承してきた道祖神の信仰とも習合し、冥界とこの世の境に立つ地蔵は境の神とされ、境の神をシャグジと称したのに当てて勝（将）軍地蔵が生まれました。また、塞神・サエノカミとしてサイノカワラを想起し、辻の地蔵に石ころを積み献じる信仰が生まれました。近世には、民衆の願望すべてにこたえてくれるものと期待され、延命地蔵まで生まれています。現在、地蔵はさまざまな利益や由来、供物などに基づく愛称を冠して各地に安置されています。

さて、谷野の十王像は、いつ頃から「蹴飛ばし地蔵」と呼ばれるようになったのでしょうか。十王堂について、江戸時代後期の文化文政時代(1804～30)に編纂された『新編武蔵風土記稿』をみると「地蔵堂・木造立身長1尺又十王ノ木像アリ各長八寸許・・・」と書かれ、明治13～21年(1880～88)に編纂された『皇国地誌』には「・・・十王堂・・・」とあります。さらに青梅市教育委員会が平成6～7年度に行った青梅市仏像彫刻調査の報告書『青梅市仏像彫刻調査概報Ⅲ』によると、「十王堂・・・地蔵菩薩立像1軀像高30.4cm・・・十王坐像7軀像高20.9～20.0cm・・・童子形立像2軀像高26.0cmと25.0cm・・・彫刻断片1個長19.1cm・・・すべて江戸時代の19世紀の製作・・・」とあります。これらの史料から、十王像の大きさは、19世紀にはまだ十体ともそろっていることがわかります。また、堂の呼び名に注目すると、江戸時代の「地蔵堂」から、明治時代には「十王堂」と記述が変わっているため、堂内に安置されている地蔵菩薩像よりも十王像に人々の関心が寄せられていたと考えられます。これらのことから明治時代には、「蹴飛ばし地蔵」と呼ばれるようになっていたと推察されます。

「蹴飛ばし地蔵」のような例が他にありますか。

岐阜県にある正宗寺（しょうそうじ）の薬師堂にある仏像（薬師如来）は、子ども達に持ち出されて一緒に水泳をしたといわれます。そのためその像は、磨り減り傷だらけになっています。急流が多い飛騨地方での子どもの水遊びの守り仏として、大人達が許したといわれています。この像は、円空仏だということです。円空は江戸時代前期の僧で、現在の岐阜県に生まれ、修行のため東北から東日本を行脚し、各地で多数の仏像を造立しました。生涯に12万体の造像を発願したと伝えられ、遺作は5千体を超えるとされています。

どんな願いにも応えてくださるというお地蔵様でも、蹴飛ばしたり水の中で遊んだり、なんと大胆なことでしょう。それを許した大人達の強い願い、寛容さ、温かさを感じずにはられません。谷野の「蹴飛ばし地蔵」も、正宗寺の円空仏も、子ども達の健やかな成長を願う人々の気持ちが伝わってきます。いつの時代でも、このような思いの中で子どもは健やかに成長して欲しいと願います。

（文責 三好 ゆき江）

【参考文献】 日本民俗事典 大塚民俗学会編 弘文堂  
日本史広辞典 日本史広辞典編集委員会編 山川出版社